

本コーナーでは毎号1つの国の取り上げ、その国の映画作品とゆかりの観光地をご紹介します。

シネマで世界旅行

Vol.1

Destination >>



ドイツ連邦共和国
Federal Republic of Germany

冷戦時代の悲劇 だけじゃないドイツ映画

日本で観られる現代のドイツ映画は、ベルリンの壁がドイツを東西に分断していたことによる悲劇や、ヒトラー、ナチスを題材にした社会派の作品が多い。『善き人のためのソナタ』などドイツならではのテーマで作られた社会派の映画は確かに見ごたえがあるが、それ以外のジャンルでも興味深い作品は少なくない。

あの美しい城をつくったのは、「狂王」と呼ばれた美形の王だった

『ルートヴィヒ』 製作年：2012年 上映時間：143分



国王となることの大変さは、庶民には到底計り知れない。ましてや国の命運がゆだねられていけば、なおさらのことだろう。若くしてバイエルン王国の王となったルートヴィヒ二世は、繊細な感性の持ち主で「国民に必要なのは武器でなく、詩と音楽の奇跡」と信じていた。当時の国民には常軌を逸しているとしか思えなかった王が浪費とたたかれながらもつくったものが、今ではバイエルン州を代表する観光資源になっているとは、何とも皮肉なものである。

監督・脚本：マリー・ノエル、ピーター・ゼアー 出演：ザビン・タンブレア、ハンナ・ヘルツシュプルング、エドガー・セルジェ 発売元：ブロードメディア・スタジオ 販売元：ポニーキャニオン DVD価格：¥3,800+税 © Global Screen GmbH / Stefan Falke

ベルリンの壁崩壊直後の社会は、旧東ドイツ市民の目にどう映っていたのか

『グッバイ、レーニン!』 製作年：2003年 上映時間：121分

1989年11月10日、東西冷戦時代の象徴だったベルリンの壁が崩壊した。壁の上によじ登って喚起する人々の姿は、今でも目に焼き付いている。だが、旧東ドイツの人々の目にどう映り、生活はどう変わっていったのか、正直よくわからなかった。「自由に行き来できるようになったし、物質的に豊かになってよかった」という単純な話じゃないことくらいは想像できるが、かの地で暮らす人々の心の中はどうだったのか。そんなことに思いを馳せたくなる1本である。

監督：ヴォルフガング・ベッカー

出演：ダニエル・ブリュール、カトリーヌ・ザース、チュルバン・ハマトヴァ

発売元：ギャガ 販売元：東映・東映ビデオ DVD価格：¥2,800+税



生きている限り、年を取ることは避けられない。でも、自分らしく最期まで生き抜きたい

『陽だまりハウスでマラソンを』 製作年：2013年 上映時間：115分



過日、独り暮らしをする父に介護施設への入居を提案したら、あっさり断られた。「施設のほうが寂しくないし、安心できるんじゃないの?」と思ったが、そうではないらしい。そんな時にこの映画を観て合点がいった。「なるほど、そうだったのか。気持ちをわかってあげられなくてごめんなさい」と心の中でわびた。人間の身体は遅かれ早かれ、意思に反して老いていく。人生の最終章をどう暮らしたいのか、考えさせられる作品である。

監督：キリアン・リートホーフ 出演：ディーター・ハラールホルデン、ターチャ・ザイプト 販売元：ハピネット 発売元：『陽だまりハウス』パートナーズ DVD価格：¥3,900+税 © 2013 Neue Schonhauser Filmproduktion, Universum Film, ARRI Film & TV

イエロー系→旧西ドイツの州
オレンジ系→旧東ドイツの州



映画にゆかりの
ドイツの観光地



① ノイシュバンシュタイン城
名前は知らなくても、この写真には見覚えがあるのでは? ルートヴィヒ二世の中世趣味を具現化した美しい城は、ロマンチック街道観光のクライマックスとなっている。



② イーストサイドギャラリー
ベルリンの壁は統一後に撤去されたが、一部は残され時代の記憶を留めている。東ベルリン駅近くの川沿い約1.3kmの壁は、アーティストたちの絵が描かれ、オープンギャラリーとして親しまれている。



③ ベルリンテレビ塔
1969年、旧東ベルリンのアレクサンダー広場近くに建てられたテレビ塔は、現在、ベルリンのランドマークとして、存在感を放っている。

(執筆/ライター 更田 沙良)